

精神疾患を持つ人々への Interactive Music Making のアプローチ

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター

本研究は、統合失調症を含む精神疾患を持つ人々に対し、IMM (Interactive Music Making: 相互作用的な音楽づくり) パッケージを実施することで、精神疾患を持つ人々が苦手とする、対人関係の促進を検討することを目的とした。IMM とは、小集団で構成され、活動参加者および実施者が相互に関わるようにセッティングされた、即興がメインの音楽活動である。

対象者は、統合失調症の診断名を持つ 39 歳の男性であった。音楽活動自体の参加者については、自発的参加に基づくために制限はなかった。プログラムの評価においては、一事例研究デザインを採用し、対象者の標的行動と REHAB を中心とした上で、主観的アセスメントなども取り入れ多角的に検討した。標的行動におけるデザインは、般化プローブつき ABA デザインであった。般化場面の測定は、茶話会場面を設定して行われた。REHAB に関しては、プレ・ポスト比較で検討した。フィールドは、精神病院の男女混合開放病棟であった。実施期間は 5 ヶ月間で、音楽活動は週一回、茶話会は月に一回、それぞれ行われた。介入について、音楽活動場面では・導入、自己紹介・楽器を使ったダイアログ、・即興をメインとした活動、・リクエスト (音楽鑑賞) と感想、という構成が設けられた。般化場面では挨拶以外の介入は行われなかった。行動の指標について、音楽場面においてはメンバーへの発話数とし、さらに茶話会場面においては始発と返事を細分化して測定された。その結果、対象者の音楽場面・茶話会場面における標的行動の増加がそれぞれ示唆された。また、REHAB から、特に社会的・対人関係的な項目 (社会的活動性) に影響があったことが示唆された。社会的妥当性においてもポジティブな評価が得られた。

以上より、相互作用に重きを置く IMM パッケージが、参加者にとっては余暇活動として機能し、直接適用しない他場面にも、対象者の対人関係を促進させた。上記の結果は、1) 音楽活動の参加率やパッケージの内容が一定でないという条件の中で、標的行動である発話数が、介入 (実施) 者に対してはばらつきが見られるのに対し、他者 (茶話会場面における実施者も含まれる) に対しては増加が見られること、2) REHAB の項目、「社会的活動性」において、対象者得点と定期的参加者の平均得点が、その他の成員の平均得点と比較して改善されていたこと、3) その他主観的アセスメントにおける対象者・参加者の様子にポジティブな側面が見られたこと、の 3 点より考察された。